

はしがき

1人または複数人の全部義務者が破産した場合の債権者の権利行使について、わが国の破産法は、開始時現存額主義を中心にして議論を展開している。私も大学院博士後期課程を標準修業年限満了退学し、助手として採用された翌年の2002年(平成14年)に、本書でも取り上げた最三小判平成14年9月24日において旧破産宣告後の物上保証人からの一部弁済と債権者の権利行使について最高裁の判断が示され、それについて未熟なものではあるが研究成果を公表したことが、開始時現存額主義を研究するスタートであった。当初は、長く研究を続けるテーマとして捉えていなかったが、本書でも取り上げたように、その後も開始時現存額主義に関連する最高裁の判断がいくつか示されることがあり、その機会に開始時現存額主義について研究を進め、いくつかの研究成果を公表してきた。また、大学院在籍中よりイギリス倒産法について関心を持ち、開始時現存額主義について比較法的考察ができないかと考え、研究を進めることもあった。そのような研究成果を東日本大震災の爪痕の残る中、2011年5月に開催された日本民事訴訟法学会第81回大会(於：一橋大学)の個別報告において公表する機会を得たことは、生涯最大の僥倖であったと同時に、自らの研究がまだまだ不十分なものであることを知る機会ともなった。そのことが、その後も開始時現存額主義をめぐる研究を進めることにつながった。それらの成果については、巻末の初出一覧に掲げたとおりである。

本書は、開始時現存額主義を中心としたこれまでの研究に関して、「点」でしかなかった研究成果を、新たに「多数当事者の債務関係と破産～求償権者の債権届出と開始時現存額主義の制約～」とのテーマのもと整理するとともに、多数当事者の債務関係に関する破産手続上の取扱い、という問題意識のもと、その検討対象をより明確にした上で、従来の研究成果の中で不足する点を新たに書き下ろし、1冊の研究書としてまとめ公表する運びとなった。まだまだ検討が不十分な点も多々あり、今後の検討課題とすることもあるが、諸先生方からのご指導・ご批判を賜れば幸いである。

本書を上梓するにあたって、これまで未熟な私に対して、励ましや、叱咤、激励とともに多くのご指導を頂戴した諸先生、諸先輩方には深く感謝するとともに、あらためて厚くお礼を申し上げる。すべての方のお名前を挙げることはできないが、私が大学院で倒産法を研究することを目指した端緒は、学習院大学法学部在学中に松下淳一先生のゼミに所属したことであった。その後も折に触れご指導を賜り、またゼミ卒業生の交流の場でもお目にかかり近況を報告する機会もあり、今でも温かいお言葉を頂戴できることは感謝の念に堪えない。

青山学院大学大学院進学後は、西澤宗英先生から厳しい指導と時にユーモアのあるお言葉を頂戴した。大学に職を得てから特に思うことであるが、当時の厳しい指導がなければ、本書だけでなく、その他の研究成果を公表することもできなかったと思う。あらためて深く感謝を申し上げる。また、大学院進学後より、慶應義塾大学で開催されている民事訴訟法研究会の末席に加わることをお許しただけた。このことは、極めて影響の大きかった出来事であり、私が研究を続ける上で必要な多くのことを学ぶ場であったと思う。石川明先生をはじめ、坂原正夫先生、三木浩一先生、石渡哲先生、三上威彦先生から直接お言葉をいただき、また、法科大学院開設後は、春日偉知郎先生、中島弘雅先生からもご意見を頂戴する機会を得られ、さらには多くの先生方、諸先輩方の一言一言を頂戴できる場であった。そこで頂戴した言葉が、研究者としての私の姿の一部に刻み込まれている思いである。法科大学院開設時期に一時的に出席できなかったことはあるものの、現在も出席を許されており、大変ありがたいことである。あらためて感謝を申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜れば幸いである。

そして、中島弘雅先生には、イギリス倒産法についての研究はもちろんのこと、その他の研究についても様々なご助言を頂戴しただけでなく、主催される民事手続法研究会への参加の機会も頂戴した。この研究会では、新しくお目にかかる機会を得た先生方も多く、またそれらの先生方からご意見も頂戴できた。このことは、これからの研究に対する新たな道筋を見つける機会であったと思う。あらためて深くお礼申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜れば幸いである。

本書を上梓するに際しては、法律文化社の畑光氏に多大なご尽力をいただい

た。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

また、本書は、南山大学学術叢書として出版される。本書の出版助成に関しては、学内外の審査委員の先生方に審査の労をとっていただき、また貴重なコメントを頂戴した。学内の関係機関に関わる教職員の方々にも多くの支援を頂戴した。あらためて深くお礼を申し上げます。なお、その審査の関係で本書では参考文献において文献の略記をしている旨を断っておく。

最後に、私事になるが、これまで研究生活を続けるにあたって、全くの未知の職業を選択したにもかかわらずそれを支援してくれた両親に本書を捧げる。残念ながら、父は、2019年11月に他界したため本書を見せることはできなかったが、母には本書を見せ、これまでの支援に深く感謝したい。

2020年11月

研究室棟から名古屋市内を眺めつつ

小原 将照